

## 中 古

平安時代に『万葉集』の和歌がどのように読まれ、どのように位置づけられていたかという問題は、単に『万葉集』の享受だけでなく、平安時代の文学を考へるためにも重要な研究課題である。浅田徹「十世紀半ばの和歌と時代―好忠『毎月集』・うつほ物語』の屏風歌―」（塙書房『和歌と貴族の世界 うたのちから』3月）は、好忠の「毎月集」の歌の中で「下層の労働者」に仮託された語り手が頻繁に「万葉風の古語」を用いている点に注目し、そこに「延喜・天曆」期の終りを生きた下流貴族たち」の「古語を未開の言語のように低く見る意識の現れ」があると論じる。たとえば『伊勢物語』十四段でも、陸奥の女が詠む歌に万葉歌が使われ、それが「歌さへぞひなびたりける」と批評されているが、これもまた浅田の指摘と類似した万葉歌利用の手法と言ってよい。

しかしながら、万葉歌が当時ただ低く見られていただけなのかどうかについては、なお問題が残る。『万葉集』の伝本

研究を精力的に続けている田中大士の「久世切と万葉集抄出本」（『汲古』516月）は、「人麿集」第一類本の一部と『万葉集』抄出本との一致を指摘した景井詳雅の平成十八年度和歌文学学会大会の発表「人麿集」の『万葉集』享受」を承け、久世切等の『万葉集』抄出本を詳細に検討して景井の指摘を補強する。背面に記されていた文字の痕跡である鏡文字の解説などスリリングな手法を駆使した好論だが、景井の論とあわせて、『人麿集』の成立について具体的な視野が開けたことの意味は大きい。今後は、田中の論をふまえた景井の発表の活性化が待たれる。

中周子「拾遺集」における人麿歌の増強と編纂（『樟蔭国文学』44 3月）は、『拾遺抄』から『拾遺集』への増補にあたって人麿歌が大量に増やされた事実について公任の「三十六人撰」なども参考にしつつ分析し、「人麿を貫之に比肩する歌仙として位置づけ」る目的で「貫之歌と組み合わせるために人麿歌を

増補したという編纂意図」を読みとっている。中論文にも旧著が引かれている阪口和子の「公任の秀歌撰にみる『万葉集』享受」（『百舌鳥国文』18 3月）ではさらに「三十六人撰」の人麿歌について、「人麿ではあっても実質は『万葉集』の代表としての名前であり、人麿個人の歌に限定されずに古歌・万葉歌という広い範囲から」秀歌が選ばれたとする。両氏の論は交錯しつつ微妙な異なりを見せるが、阪口の論は景井や田中の指摘ともつながり、当時の人麿像を考へるうえで興味深い。冒頭に紹介した浅田の論は、近接する時代のこのような現象をどのように位置づけるのか、統論を待ちたい。

藤田洋治「建久三年本『人麿集』から見えるもの」（『東京成徳短期大学紀要』40 3月）は、親本が冷泉家に存在したと考へられる新出伝本の紹介と考察。論中に名前の見える山上忠麿とその冷泉家との交流については、令息山上伊豆母の編になる著作「増補 有職故実論集」（大文字書店 平成5年）が詳しい。

坂野信彦「ならむ」と「なるらむ」―その一音の差―（『国語と国文学』2月）は、類似する二つの語法の使い分けの分析を通して、「八代集の結句の多くは三音めで切れ」、そうでない場合は「ほとんどつねに五音めで切れる」点で

『万葉集』の歌と大きく異なっていることを指摘しており、興味深い。

『百人一首』にも選ばれてよく知られる在原業平の「ちはやぶる」の一首は、その大胆な発想から漢詩の表現に学んだ可能性が大きいと考えられてきたが、典拠とすべき具体的な漢詩の作例は見出されていなかった。大谷雅夫「唐紅に水くるとは―業平の和魂洋才―」（『京都大学国文学論叢』17 3月）と久保瑞代「在原業平の『韓紅に水くるとは』と中唐詩―白居易と薛濤の比喩―」（『言語表現研究』23 3月）は、ほぼ同時にその問題に答えているが、内容には共通点と相違点が混在する。特に大谷の論は和漢の相違点についての目配りがきいていて学ぶべき点が多い。両論文がおもに注目しているのは白居易など中唐の作品だが、その時期の中国文学の特性をなごらく検討し続けてきた諸田龍美の「中唐恋情文学と国文学の展開―『風流・みやび』篇―」（『愛媛大学法文学部論集』22 3月）は、「風流」「みやび」「雅俗」といった言葉を手がかりに中唐文学の影響下に成立した「王朝の美意識」の性格を探ろうとする長大な論。「専家」としての蓄積に裏付けられた中国文学の分析と比べ、日本文学への言及は通説を借用するところも多くやや

迫力に欠けるが、さまざまな点で今後の平安文学研究に示唆するところが大きい。今後は、国文学の「専家」も巻き込んだ、具体的な視野に立つ、それによって個々の文学作品のイメージが大きく変わるような議論の展開が望まれる。

酒井瑠美「『あふこともがな』と『あふよしもがな』―百人一首五六番・和泉式部歌について―」（『国語国文』6月）

もまた「百人一首」所収の歌を取り上げ、その結句を数多くの用例を引きつつ詳細に論じていて迫力がある。川村晃生「和歌から『焼畑』を考える」（『芸文研究』18年12月）は、社会変化による景観の変貌に目を向け、ふだん気づきにくい古典和歌中の光景について論じた異色の論。濱中祐子「『口伝和歌釈抄』から『綺語抄』へ―初期歌語注釈書の生成―」（『和歌文学研究』94 6月）は、「冷泉家時雨亭叢書」38に影印された新出資料『口伝和歌釈抄』の分析を通して初期歌学書の性格を考えている。

国宝「源氏物語絵巻」の復元模写完成をひとつの契機に、三田村雅子・川添房江編「描かれた源氏物語」（翰林書房18年10月）など、絵を通して『源氏物語』を考えようとする企画が多いが、共同研究の基調報告として文章化された横井孝「物語絵の『かたち』に『意味』は

あるのか」（『物語の生成と受容②』国文学研究資料館 2月）は、転用・流用などを含め、さまざまな「型」による表現が多い物語絵を、近代絵画のように「深読み」することの危険を論じる。論の末尾に添えられた共同討議の記録も含め興味深い指摘が多いが、たとえば「型」による表現を基本とする日本の芸能芸術すべてに「意味」がないとすれば、逆にその「意味」とは何かが問われることにもなろう。ともあれ、絵と文学についての議論はいま、これまでになく盛り上がりつつある。この議論が着実に深まり、豊かな実りに結実することを望みたい。なお、徳原茂実「裳を着けた女三の宮―源氏物語絵巻『鈴虫』試論―」（『武庫川国文』69 2月）は、「源氏物語絵巻」の復元模写に伴う新解釈に対して異論を呈している。

加藤洋介「建仁二年定家本伊勢物語の復元」（『中古文学』79 6月）は、従来「古本」の一本とされていた天理図書館蔵伝為相筆本が実は建仁二年定家本の伝本であったことを明らかにした有益な労作。内野信子「蜻蛉日記」の「あがたありき」―倫寧娘と兼家妻の間で―」（『国学院大学大学院紀要―文学研究科―』38 3月）は、「蜻蛉日記」の特異な人物呼称に注目して興味深い。